

十二欠

風節
柳多留之編

1147
30



門 へ 9特
第 1147
卷 30



新樽世一篇

此編ハ一口子の志成結々古川舟の
撰ミ一神社奉納の額木の表々
志成集免もえり和笛返後
世句以今々一編となし佐尹子
の志成を祀ふのミ

多化之世の秋

花山林藤
五三草

十二欠



たを川の持る最句の礼中身。
 かんをんよ生玉を虫くつくたところ
 中よ玉をせり出と能く玉を
 生田流るまよふ夫人の引をど先
 娘の氣ふ合ひの尾の所へ
 田毎程けいせいのかま月乃多
 杉政の後家々存つと茶つと云い
 せんまんと築山夜のるいおか
 きらいつりやをめのたいと一そよみ

柳世二第一

而社をるの何とて極つと
 ちつと金へ何の自しつたれいより
 ほんやとよあし女おすもおしより
 とんさるや夜中よおたてかか来
 お玉ひひひの男せたのなり
 あふの婦よげいよかりて
 ちあつとこの住とよまよはまをち
 花をるうりすとあまよき尾の
 ほむりてんくちをきむ祓人こ

ぶいどろの中でおうくを福に福しん
さうと案のト結で座つてあふがりて
飯時やうまを申すとに飯を来る
あつたふ金ぐたつて後らんちり
古里さうく大めしを喰りよ来る
んふがぬさると屋ぶおんさうくあり
まんぢうの喰むと何処川をちんちん
いふつたのめと肉つとさげりお
しり客とわつてお造をいふぞとせ

柳世ノ二

世の師乃ちりなま 中と夜
ふたとい尻をさるのふうつて
よとさふたさるとたてア帯をさせ
い中も分いむし千の今をい凡
殿さんと思のお老いこそさうな
時をたきほるさるい小押かり
死のゆきけりもよめねんあ客
赤かちしよりい白をらのほつて
初午よ世の西あいつくはいつて

い子ぶいしんく〜抱ひあ〜暗か来
 氣が来志やア福への母若ふ海の時
 争う井ふ笠が何〜りぬ〜き店こ
 大馬をおぐ〜魅の〜好〜し〜る
 むりない志もおつとあ〜本を移〜切
 いろ男百れ肉でい神穂や〜り
 神田川〜堀り人成婚り登〜
 びきふ四く後ふ〜紀年〜輝〜り
 おそら〜し〜新ぬきの入癒イかり
 神世二三

おま〜い〜とむあ〜〜おま〜さ〜り
 江戸の何〜ごい〜なげ〜と〜母です〜
 ことひ〜で〜師匠〜〜あ〜な〜り〜
 安正仁者垢て車〜〜〜成あ〜
 信ぶせ〜の〜切丸を〜〜ま〜
 片〜〜何〜ふ〜〜を〜〜
 市川〜松山〜紙代〜〜り〜ん
 世さ小まけ〜を女房〜ら〜と〜い
 頂相〜偏文〜マと子房〜人〜き〜り

和のんの靴より温公と猪家
 考申すまはるる所ありを連て今
 麦秋ふあり絲ふとんを袖ざらるる
 十二文の破を中戸ふふたまはるる
 川むさこのは刺は河はほらるる
 夕まみくまの形りこ女考
 ちこむむいせとへ志きて小町る
 のこむむや一日こ平をまはるる
 ふく井いもるをえむふ二日の夜

柳世二四

十二欠

を記ふめつ務おめうけのおるるなり
 とらぐたをのらるる系のをふるり
 川と免の状を武人ごとよむふこ
 及このまはるるの雲所を越るり
 及ややおるのの途く具もるり
 南やと彩敷のできるにぎやうさ
 新くもるめあふこふ乗納め
 了井をおふするい志やの目
 目るの及手う板屋のをあるこ

美おらーしよる野中いづまよきた
 口嘉
 心志の白世いそのしらんくあり
 凡愁
 六全ころをせ下利体まきをーめ
 五休
 一し一子一こ一さの掃や一いむおま
 凡端で一掃こおがな一西一の
 千終
 幼まあの一傘いん
 岸口
 靴のかぶのふれあの一
 一
 一を死ひ志をりをけ一志は終
 一
 中ふむりは事あつこ一くあふり
 岸口
 許世一六

せんがんのうらうらうぬら後り
 芥史
 暇どーむびふーそとらおあふり
 法印
 万治いぞんいさううちが山やて葉
 柳多
 ろくぐの法をゆあま極あ人の
 川長
 千あをつみいむま子がくらどれ
 今
 かけあこの娘もみま出るをれい多
 ぬ花
 整り涉やりてのさーふまら文
 川長
 意い付くり世場へのあふりより
 飛龍
 足せ花あつ年一くもををく死
 一子

志ぬ柿いらの柿んくをひいそ原の
 千路
 かしとれくは法然いごくこん意
 つ柿
 まくいゆあがくくすいんく
 湯水
 お十夜いあんずの娘であー
 本好
 よある人いつりあすす細うすれ
 姫小
 つららあのだまういさく去ておき
 侍良
 妻のをせいの宿のあうて喰い
 洗原
 くはん志くか難いそまもと村の希
 丸水
 江戸のまうくさふ駒をとらる石
 石声

柳林一八

又年あつてもふ志んせぬのもふ孝
 孝母
 子をりて白臭とくはづくろり
 芳童
 湯女の屋あうり臭中てそくま
 玉童
 わりまのをたのーふーて笛吹成
 串材

本郷天満宮奉納句合

西意人日まてい成子らそごんけり
 芥丈
 あくま孫いこそ右平せよケるこ
 久基
 天神城津ー時多せし柿
 川也

目お三日袖いもーしきまの縁
 白酒のやゆー肉ハ玉代汗
 大ぞーしーとむかぢうつま込
 去そーち切りてうけくまー
 ちーやーやとま刀ておどすう
 けいさのぢうちやさふほ杯ぢぢり
 ぢめじうひひも糸をーしよひ
 さくや娘三玉一十のまをひをり
 十あてーしつがぢーちかまさせ

柳世二九

糸をーしつがぢーちかまさせ
 さくや娘三玉一十のまをひをり
 けいさのぢうちやさふほ杯ぢぢり
 ぢめじうひひも糸をーしよひ
 去そーち切りてうけくまー
 大ぞーしーとむかぢうつま込
 白酒のやゆー肉ハ玉代汗
 目お三日袖いもーしきまの縁

卯木
 宿禰
 丸島
 白濱
 長祿
 奥交
 娘小
 早才
 長竹
 柳世二九

田畑村早川善門院寺内西行審奉納句合

阿まら及西形産いまのつり
 されがおくは花の神より
 十七里先キ小峠一ひ名を殊
 之味せんの手にてもそれるを猫
 の手ぬやつ舟南くつと屯よあき
 傘ぞこころを食い
 ニツニツく志やその上をほ
 とざくはまをその山まの中所

洗心
 和苗
 名在
 如雀
 串材
 洗心
 突火
 二休

林世二

十二欠

心ひ没日る残の本橋てま家
 目花の山くまかめをうぐも
 まあおやあめくものなつにお川
 去りかめあつては年つらなり
 おもいうとてうんせいのひあひ
 とのうら海をばてあをんをうは
 つるに古ひと入るいわや
 糸がでい志のんは戸でい式
 七いご切りきると二かひてもち

全
 由香
 洗心
 門柳
 如雀
 由香
 西澤
 糸案
 名竹

用う何やや事やまよと志きのやのこし
媽礼力の志や一戸夕つけむあせ出し
八柄々つづつゝいあをいふふととら
古みうととぬぬのまにりかゝむや
かぬいかけ古ひこまのららとら
あせまを人こらまのあひと下女う若
つよひありのひも秘もおきてかこまり
あふみんく後生を奉ふ之度秘ひ
一也り花ちまきくも又くまり

柳世ノ十三

丸
左満
玉子
花
そ
串杖
栲好
赤柳
柳

一十三

あつそいいらしひりくもまなくかり
ゆきで一のむがそよと袖をり
秘りくよふく女房をまのせり
母と免つこの目ふゆじんら若やらあ
下ヶ穢ぶくひもむ下女のまらり
神子あはしふくも

一口
ふ連
芥末
若竹
門柳
丸

麻布・神明宮奉納句合

斗まもいり一のあはまそむいり

和笛

一ヶ所いれうへへぞく時の境
まらぶつにたにくあふをきあり
近ふや遊りみけて事なづつ
口のけいおを我ふりの酒やそり
人のあつてきりくむまこふを尾
たがふまといひみ格牙おふたひ
名代いりつはけらまるけびさ
ひまこのふけより大方舟てあふ
ゆまにけのまめぬお織をわすれ

柳世ノ十三

門柳 川 舟連 寸 和笛 小舟 五舟 全 法江

けんやういかりもさるる人
夜より舟は立あがりとはうじ
やつをさるうつけか出る四家老
おりぬくたのく親父いきがらん
百両を男うらうらうはく
まんろくふ城をしてゆくふ家老
百両く一生あふんぬのをさ
まはをゆるしぬるを英一
いつけをとらうで志る一人の者

若竹 五英 五舟 小舟 舟連 全 柳 五連

大原河原(はらまき)の七ナメ
 けいふ(きふ)のきりにあか
 りん(りん)の紙をやうい小松反
 かん(かん)のうれとて大門つぎびきこみ
 大塚小はかすのやあひひり
 るやどりの空(そら)をくりきりまん
 必(かならず)とま(ま)りいと送りあがひ
 戸(と)のけいふ(きふ)とあひひりま(ま)はつひ
 り(り)とあ(あ)ひひりいとあ(あ)か(か)と(と)あ(あ)ら(ら)

柳世ノ十五

を(を)あ(あ)ら(ら)む(む)ど(ど)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 笠(かさ)の(の)う(う)ま(ま)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 十三(じゅうさん)里(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 ま(ま)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 雪(ゆき)ふ(ふ)り(り)よ(よ)ご(ご)う(う)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 松(まつ)の(の)う(う)ま(ま)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 せ(せ)ん(ん)の(の)う(う)ま(ま)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 ね(ね)ん(ん)の(の)う(う)ま(ま)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け
 け(け)い(い)ふ(ふ)の(の)う(う)ま(ま)り(り)あ(あ)ら(ら)む(む)つ(つ)け

法(ほ)法(ほ)
 丸(まる)水(みづ)
 五(ご)章(しょう)
 由(ゆ)音(ね)
 凡(ぼん)東(とう)
 可(か)術(じゆつ)
 白(はく)連(れん)

あはらの牛玉を菓子やま(玉)
あのはらうらうらのこと地づけり
かりらちもなごひちをあまらら
四年まあふ非らんをさるまら
志中らんか塔のみをあごまつて
玉子のほら玉子とあつかり
やきりらの佐よあまのせし中
ぬりまのト女さああふあ
あまの湯と十き屋で大さるら

柳世一十六

大め一や喰つてるとと入岩うあ子

上総國長者所地藏尊身

二十めの肉くまあふのさし
あご一金まあふとさるらあ
あらら一ふららのら山乃四あめん
あらびてあまあまあまあま
あまあまの外いのさすむらば
あまあまあまあまあまあま

洗

玉童
柳
丸
舟
若竹
中
全
蓮
芥

如
川長
芥
二丁
赤
中

けよもや紀上田いふもんなり
けんきぬのつたや竹のけりあり
きぬい出さるとおとすあり
うそと思ふと女多ういふあり
あゆんがでると男ぶりのあり
定ぬはらざるとんをもあつと入き
あゆんがさ公家元をきていこめる
一手夜かしくととまの袖あり
せん人のうそを井戸くし海を出し

柳世十七

未学
全
凡多
串掛
多集
全
如春
全
集

五城下の名も名月いささなり
けんがやとたぬのきふ人あり
略いも一斗りごとと母あり
竜のよらんのかつても武人など
ふ男の娘乃居取と人いさる
あゆんあり及きぬうりも急かす
ゆきまの月をまのじこもあり
きぬいひんふくをいんらまのいん
きぬいひんあふふある娘をとり

芥衣
柳百
柳次
串掛
娘小
洗結
串取
芥衣
東尼

さし地ではいやはだん丁のやうなうら
きり木の材ハナメむき河くらの
おりゆきゆせけんのおらひ女ぢりり
百人よき人りのいさめおらひあり
おんぞとさかいたのきりおんぞ
大山へさうさおらひふまけるよ
つくむさかひさかひさかひさかひ
おんぞとさかひさかひさかひさかひ
おんぞとさかひさかひさかひさかひ

柳百
門株
名集
芥丈
如若
紀多
波路
三丁
串材

柳世丁十八

あろくものうらとさかひさかひさかひ
おらひさかひさかひさかひさかひ
りやふおらひさかひさかひさかひ
金おらひさかひさかひさかひさかひ
おらひさかひさかひさかひさかひ
五人おらひさかひさかひさかひさかひ
よらひさかひさかひさかひさかひ
このふて目ぬきさの男がうらとさかひ
さすのぞんぶりさかひさかひさかひ

如若
門株
雨憚
串材
波路
西澤
由香
浪海
門株

淋しいと云ふは心も淋しいまこととて
出来立テの男をあらはす川
江戸もがらのや川とて女あり
道りさうらう 四万六千人
先キ着てまじをもち居る侍
ふびやを母のくちりておと居
ふとておとさる敵のあまふあま
ゆどのさんへくさんをおけてはさうさ
かづげんさんまでおすまうさ

柳世二十九

荒馬 東水 串村 全 柳舟 五重 三丁 若木 本歌 柳世二十九

うんといふおんさんとほろりんまよ
八郎ふと年を流さどくいの君あり
らせん門の位もかきおとくる
百人のまけて七夕をやくさり
いざりのおけらまけともさうら
ぐらんといひくますらよのいかによ
あつたうを命金座やの田うり
つき出の田用おりのもやよ
猫やあづるを里の母とてさる

各集 柳舟 柳声 洗石 如雀 川長 和笛 芥丈 馬物

ちやうと申すもこの世の後のうらみの
 とどろきりまやうとるらうらうら
 わりかたをすまやみでみ丁中のどろき
 先づり小ま出のくるまののたう
 らくオでもんどのをかまうらうら
 まちやととまやうとれつとまのあひ
 うんどいあうらうらうらうら
 まちうらうらやでまうけうらうら
 まちやうらうらやちまのうらうら
 玉章

折世ノ二十

あつらひのちやうとこのオのうらをら
 入麻をうらうけうらうらうら
 むらうらうらまやうらうら村のうら
 仲人にあまうらうらうらうら
 片月とやんものまげんハ九人
 出け一つがまうらうらうら
 多て凡いも尾がひひの合ぬあり
 手あひやまやん女の出まあり
 まつらうらまあうらうらうら
 唐胡
 洗心
 同衆
 三丁
 草故
 門柳
 洗心
 合
 口松

二七二

三丁
 生
 生解ふ人日れあるものか月
 のついで初る空つらと地はむげ
 身小目をあつたげ若く大うと
 正んあてん合ふくく出まのなり
 十三里先キふ多門の里へん杯
 孔子れのいまこよんてあうらうら
 じへるあま家い梅どの中かぶらん

梅川一ノ水三

長中
 あ舟
 心口
 百俵
 串杖
 六舟
 六集
 六座
 鞠志

おりのきぬ十二の外の外はれと
阿のんゆいにはせまともをあら
そのあれくかいまうほまき
げじくやあまくとおまうつひ
あんおまきんくおまあまきあり
かえい四帝あまきい後九帝
あまのまういおまうつらや
けちるたきありのあまうつらや
おの衣式新ふ屋あまうつらや

聖声
花文
如春
程声
藤舟
芥文
芥葉
玉章
淡路

柳世二廿五

考よけのあまう西りあま入るま
戸板あま布きせまきいそんき
夏つりいまびまあまのまどめあり
さつりいあまあまをさつりあま
切りあまいあまをまき大あま
下夕あまあまあまのあまいひあま
目くらあまあまあまあま
りあまあまあまあまあま
女房あまあまあまあまあま

如春
藤舟
芥文
芥葉
玉章
淡路
多禱
丸詠
淡路
花文
如春
聖声

美中

世をせざる外お猫とよきうなすひ
志ろうそいあもと一筋ふきよあや
あまめとびすやの娘をえあやとや
年えりむんとりけかり忘ねは時でま
何の松をそと出たるおけつまがけ
吉ひが来んぞう態板いひる縁なり
多いでとつする川二首よみ
とんあき中よりまぬとあいのそと
夕あけけんくうのういひそりり

三下
左
九下
右
全
左
九下
右
全
三下
右
全
三下
右

柳世ノ廿六

おらうのまらうをそあえかり
一やうものこたぬ中ふまらんひ
あつてを母おはげとつとと移へ
二人おまへ見せ一カ氏をすうか
りておおひやせうとやうおけけ
とやざおを去のちうとやうおけ
外トつおと母おはげとあまらん
けんせのふる男のあつらふらん
ぬまんと目あふくよあ人のけ

三下
左
九下
右
全
左
九下
右
全
三下
右
全
三下
右

三下

あつちをゆくけりしとまかきて居る
かつ海出ていせや七十お日やと
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん
あつちをゆくまのあつちまふん

折北一七

凡

娘

小

我

様

法

印

姫

凡

あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る
あつちをゆくけりしとまかきて居る

串

全

口

全

和

柳

可

日暮里西行菴奉納即吟顔面

下

白うねの猫ふくまの物へつけ
様むくみ鏡返ふわさひむくあり
かきせしちでは事屋へ拂ひまら
浄ろりひめの一どくをねとりとて
あひい志ろ福こむまめ思イ福こ
あきあらしも時ふよりり大一産
品川やうくくくくくくくくく
面やどりこくきれ才小才納言
目か度ゆらふ牡丹録いふが付き

柳世二九八

所下

玉童

口毒

玉童

車后

久集

玉童

如雀

洗所

源氏もちのしと解く生きて痛出
一年におおこよんせる金毛や凡
まゆらぎいそせは志家のへりあり
あわりののりり初い瓶と世利なり
仲人の目このもとりあすえんあり
そ度せ目あてふそりりありき
赤合相あめきりしてらんきり
かふどをま何りあらふらとま
空やの何ぞ初ノ多我のほつり

芥夫

如雀

全

后に

草奴

口毒

后に

如雀

後

今王をおつうづけてせんをせし
 せしなき哉よのわと釜の下でまゐる
 たのくひさひんのもちつふふれ
 大一生しり性生いさむをりら
 うの穢めくくそまにひるがり
 衣のたてらわらひる谷中ら
 さかのたくりんあまか二三
 人
 せんをこくせんあつふりキ
 口らうひ湯うぐんを考るた吉あり

左 左 左 芥夫 玉京 瓶声 串材 可矣 左

柳世二九九

風俗いさむせいのり身公
 めんもろむ蛙いまよりくあ
 び福りりし布袋和者い美相ま
 ちあまいむあサマびさ小福まてある

口舌 若殿 紀東 法白

事納の向くは是ふかきうとくは
 依之申次篇小又く詠方け頼曲
 亦をほらうさうくく著と屋一自好
 の雅子後世を待るくく

自好

文化二年丑六月朔日浅草
新寺少於西光寺間卷
桃井菴和笛追善句合
西評点句百四十四吟

川柳風

催 惣連中

文日堂評

浄靈山寺も仏法たれ川あり
中屋もくろ光あきよのくま
左多 枕内

弁世ノ事

ニテ國の事へ人揚うけく事
千代田村地形の度小森下り
考ごうやく紅葉の法教あき雨口
奥市殿墨画小まびる法塚中
東方小陽橋の叶一靈地あり
仏法最初字余りの新をくけ
桐の光りく風風ハ心法をある
音の良ハヤウわくお森をく炭が
ふのいり笠本もええぬ程不傳り

丸新

窓梅

玉亭

紀源

丸新

某亭

徳亭

出彦

共亭

鬼のすむ山をやうく一音よみし
 音系をたふさくさみたる
 東西小室のなる宗寺あり
 義を積ふうへん毛虫がうり
 侍の一粒撰りかかぢを付ケ
 意より亭よみを巨魁の側不意キ
 朝下久急を嘆せし像 雨
 孝美小生息をいふふかあり
 九節助の氏子百く三あり
 柳子
 孤重
 意梅
 如菴
 一徳
 五香
 雨夕
 东水

柳世一冊

おしの子指とと本坊に持テ
 筆子代と思ひし樹の時あがり
 武を捨くし河漕かたり丸あり
 秋咲ヶハ抄蒔留もききなり
 一蓮泥生蓮飯かかきイ
 園扇よえたへ持せぬ孝りき
 茶釜髪二曲せ下ハ花う咲く
 ちくく彦湯涌まど郭公
 桐切りの名方をあつが娘上手
 丸水
 井二
 斗丸
 东智
 西夕
 斗丸
 右智
 柳子
 雨夕

皇之御イを登り坊と親父云々
 結のけきを縁の上へ系り散り
 清のけきちハ築地ハ浅草の
 殿極ぞよいく小する英一
 第徳をかーく秋玉きめり
 尻ぬいたちまのすく焼餅
 鮮口や惣名代ハ乳母押子
 信玄の生ハ聖りハまへや
 さねの性ハ漫毛くめり女武者
 柳枝
 孝什
 一口
 カテウ
 車道
 英子
 玉臺
 矢心
 花鳥

柳世ノ世二

たんまりてやハ英見ハ身ハ深
 料理系屋連托の巻で付て
 きん〜ハ英見ハ孫子の御法り
 和尙のらやハ中巻ハ終せうき
 昔英見娘や為をませて云イ
 内持仏ハ内寺で禮をまらひら
 うが〜ハ心算ふ〜らぬハ花の周
 い法るハ草子ハ花ハ降り
 関の地系〜笑ふ〜ん〜
 柳枝
 孝什
 一口
 カテウ
 車道
 英子
 玉臺
 矢心
 花鳥

神といふ飛つていふとて舌の根
 吸付くかゝりかたにせしむるや
 神をさす一尊に名に通てるの如き
 おいしきお月さまより一ツ下女
 麻の庵角で毒探は度く捨し
 あるいせき心ははふくむ芽を賣
 茶をくひおひよして仲人起す
 柳一くもせし小乳賣の笑あり
 思ひより神の系をさけさせる

松人
 川島
 石井
 古鳥
 交角
 五瓶
 玉章

柳州一葉

又玉やごとぬすいと健屋云
 又玉やごとぬすいと健屋云

去菊ハ石菴成ハ尻せりり
親齋と弘法う後せりり
言修同断雑物々後へりり
文銭せ六文お齋々やりり
あ政の犬へ犬せの人たうり
役々々のゆきや斗りいお井々
枝豆ハ葉の有り顔へ鞘々りり

憲梅評

き曲く松彩気のさうけり
あ文

杯卅一廿二

君子の争ひく時措以頃載 磔川
法寺早く時代の知事る天地こ 万二
餅糸の教入相いきて掃き 丸籠
居うるたさく何りいひ箇の音ト 磔川
神考てた名い通ての紅糸あり 丸籠
灵山ハ多し佛法たの門なり 古香
わとくきん走うもたりの太厚障子 豆座
帰善提飯名きふく名せけし 磔川
二階位右の門あい又株なり 孤き

来年ハ又来季の様なり
 寺樂の音色小名のも、妙あり
 浪風を格別よたてぬ、能田山
 ちよりの音のたつのを、足て、舞り
 湯のぞんを、半人と、能治、片よ、心
 急呼、そよ、揺ると、おし、買、お、きり
 傘の、竹、は、後、生、の、よ、ん、の、なり
 涌島を、よ、ふ、か、く、は、中、り、ら
 律で、さ、つ、く、は、笑、ひ、る、君、い、尼
 磯川

梅廿一廿五

一字ハ、仮名の、を、く、く、十四日
 祭礼の、喧嘩、も、お、い、お、お、行
 登人ハ、酒、屋、餅、屋、不、傳、り、ら、お、来
 更ハ、切、落、中、何、を、む、り、勢
 何、り、の、化、急、名、を、て、判、せ、押、し
 四、家、才、の、音、少、何、く、ぬ、や、る、お、賣
 伏、立、の、肉、小、ち、ん、せ、い、ま、く、り、又、入
 そ、り、や、梅、の、盆、さ、く、と、知、り、人、は、じ
 賣、て、き、の、後、不、敵、の、い、ま、い、ひ、
 丸形
 土籠
 菅藁
 柳枝
 カテウ
 柳西
 玉上
 丸水
 世女

けぢくふついあふるとと堪居云いし菅妻
 山門を急ぎのりく教経せ余 井三
 極楽の光踏却し西光と 妻約
 阿きの名ふあつしよの西評定 丸水
 きんしよと見えい傍子の切り法 一口
 欠とおい音人ふめいあふとひき 至法
 古後買待せし健いどる有る スゴ
 きついのりふ冬きくさる貞女なり 独声
 ぬけくがしよ家んせ助もや 志心

柳世一廿六

凡の穴まふさくぬ小舟を喰い 古書
 平人の言急坂押やと云く記キ 櫻門
 法の縁徳弁あふし獲あふり 門柳
 大権威魄十六久のあ抄ひ 李什
 よく不用えらもる嘆むし以 期程
 てそこ極がゆたさぬと人が云い 處存
 てる境の冬い他玉の山で見せ ぬま
 そくくもり丸めさくもり余命 處存
 横考子急報のなんが血筋あり 矢正

子せびんく因果やうらるる金糸凡
 津福橋小苗や合せるまらひのり
 楊枝又せ正月よのを市やるる
 吉多湯のやる活判死か来て買イ
 教えへ手なると金ハ十 九と
 多けりりーメと下結せ踏 キ
 甚けりりなまもい教よんて作る
 近くの他人朱十丈布えん人家
 大丸の紙後やうふたうんり

折州丁世

女房と梁合とまらたうらぬ
 三日よの梁層々新へおや入き
 桶と急持らう定故尺ておれキ
 七種うるてい持も柏子おけ
 箱袋包とわらわちとひいてく
 四手加るぬ新大慈悲のちるさ世接
 洗濯のけりう知るゆる後の妻
 佛檀と用ハせぬ立家んを
 水多屋ハるるまへんりまらんり

山美

深江

磯川

古智

五鳥

スメ

後智

玉童

同柳

磯川

車道

西際

車乃

一徳

山雀

心雀

心雀

念仏も四十篇入るる	乾汁	東水
文浅せ六文夜毎多る	やーいづら	玉章
変生男子女たふ	土たぬ	若者
讀と書い何せ	之とら	たせやめ
何と世帯を	づら	ささる
宗合の	湯の	りり
な	桃	い
分	ん	の
志	く	ぞ
者	具	や
珠	救	世
出		

柳多留三十一編終

柳世下世

